

# 耕縁白豊

NO. 73 西畑亮一

今月は3月11日の大地震発生後3ヶ月を迎えますが、被災当事者や私たち一般国民の中に、この困難を跳ね返すような力強い希望が

湧いてきているのでしょうか。現地から実情を直接に伝える個人的で小さな情報以外、日々、飲み込みやすく加工され大量に私たちの耳に入り目にするものは食傷気味な情報が多いように感じます。その上、このような緊急事態をより適切に処理すべき政治家らの悲劇を通り越して喜劇的でさえある迷走振りによって、政治不信どころか、そもそも日本に政治(民主政)はあるのかとの想いが深まるばかりです。

ヒロシマやナガサキの経験がありながら人類がコントロールできないエネルギー政策を、なぜ私たちは「官民一体」で推進してこれたのでしょうか。この問いに明確な答えが出せなければ、ただ今現在進行中で世界が注目しているフクシマへの対応について、正しく応えることはできないでしょう。1945年の無謀な戦争の敗戦を契機に成立した日本国憲法では、明らかに軍備は持たないと書いてあるのに自衛隊があるのと同じようなこととなります。実体験から学べない、教訓が生かせない、これは1つの集団的な「学習障害」ではないでしょうか。戦力にしても原子力にしても、世界に先駆けて現実的な廃絶に取り組む資格だけは持っているはずの日本人ですが、「平和を愛する諸国民」をリードするどころか求められる動きに対してむしろ反動的でさえあったわけです。目先の損得勘定を優先し、表面だけを取り繕い、自らの頭で考えず、それを経済成長という美名で無邪気に喜んでいた節があります。

私たちは、お互い助け合うべきなのに努力や才能が報われることを餌にした生存競争という仕掛けにもまんまと乗ってしまいました。そのため、フクシマ(事故中の福島第1原子力発電所)への対策は、未だに信頼性と妥当性を得るものにはなっていません。海や空や大地へ、そして人体へと簡単には除染できない、一部には除染不可能と言ってもよい場合もあるでしょう、そんな汚染を撒き散らしている電力供給施設の事故収束に、権限と責任を持って必死で努めなければならない義務ある人たちの、何とまあ見事に自己中なことでしょうか。物理的な装置が事故中であるだけではなく、庶民の期待に応えるべき政官財の優秀な人たちが自己中という名の事故中な状態であるということが、この国の致命的な問題です。元は原子力技術者で今は反対運動しているアーニー・ガンダーセンさんも、日本の体質や政官財の相互依存的な組み合わせが、この原発事故解決への最大の問題だと指摘しています。

一方、ドイツの政財界では、庶民の原発反対の声を無視できないでいます。日本を反面教師として、着実に原発廃止への道を歩んでいるようです。そしてイタリアでは、既に原発は廃止されているようで、第2次大戦で敗戦国となった当時の同盟国のうち日本だけ原子爆弾が落ちているにもかかわらず、過去から今に続く苦しい経験からまったく学んでないように思えます。個人が健康な身体になるため部分的な対症療法ではなく身体全体を考えた体質改善がすすめられたりしますが、集団の健全度はそれを構成する諸個人全員の多様な個性の発揮程度によります。そして、私たちは「奢れる者久しからず」と、昔から知っていたのではないのでしょうか。持続的でバランスの取れた全体性を回復するため、常に謙虚に過去や他者から学び、あくまでも自分の頭で考える姿勢を保持しなければなりません。

## 学校に出席して「いな」子どもをサポート連続講座案内

- ◇ 一部「アメリカの多様な教育の選択肢について」七月九日(土) 2時〜4時◇講師：ナット・ニードル(Nat Needla)・若林美穂子
  - ◇ 二部「学習障害と呼ばれる子どもたちへの支援のありかた」七月十日(日) 10時〜12時 講師：NPO法人フリースクールふおーらいふ 理事長 中林和子
  - ◇ 場所：デモクラティックスクールまつくろくろすけ(神奈川県市川町 JR 播但線 甘地駅より徒歩10分)
  - ◇ 参加費無料 ◇ 定員先着それぞれ三〇名
- 申込 makuno02@yahoo.co.jp 電話 0790-26-1129(担当高岡)